

MazROC

マツロクプラス
2025. November

マツ六株式会社

Topics

- ✓ 手すりカタログVOL.7 発刊!
- ✓ H.C.R.2025 ご来場御礼
バーチャルツアーご案内
- ✓ 作業療法士からみた生活改善
- ✓ 建築から見るデザイン紀行

etc...

手すりカタログ 2025-2026 VOL.7

ご用命は
弊社担当営業まで

発刊!

手すり工事に必要な部材をまとめたコンパクトで持ち運びに便利な「手すりカタログ」。10月に発刊したバリアフリー建材カタログ Vol.23のダイジェスト版となります。ぜひ併せてご活用ください。今号も表紙にはパラリンアートを採用しています。

 **Paralym Art®**
障がい者アートを応援しています

～障がい者がアートで夢を叶える世界を作る～

パラリンアートは障がい者アーティストとひとつのチームになり、社会保障費に依存せず、民間企業・個人の継続協力で障がい者支援を継続できる社会貢献型事業を行います。

マツ六はパラリンアートをカタログ表紙に採用して、障がい者アーティストの活動を応援しています。



H.C.R.2025 第52回 国際福祉機器展&フォーラム ご来場ありがとうございました!

バリアフリー建材と福祉用具など多数のアイテムを展示、今秋発売の新商品も実際に見て・触れていただくことができました。会期中は多くのお客様にご来場いただき、ありがとうございました。



新商品も
チェック!



マツ六ブースへ ようこそ!

展示会場を再現したバーチャルツアー公開中!
ブース内をぐるっと歩き回るようにご覧いただけます。
ブースへお越しいただけなかった方もこちらから ➡



福祉住環境
コーディネーター

道

Q

高齢者に多い骨折として、縁側から落ちたり軽い尻もちをついたときなどに生じる「【A】骨折」がある。
【A】骨折を生じると、丸くなった腰背部を立ち上がらせようと腰背筋が常に働くために長時間の座位や立位で腰痛が起りやすくなる。

A

- ① 腰髄損傷
- ② 脊椎椎体圧迫
- ③ 捻骨・尺骨遠位端
- ④ 廃用性筋萎縮

答えは
裏面へ



住宅改修が必要な理由書から 見えてくるもの

住宅改修を実施する際に、住宅改修が必要な理由書を作成します。理由書に記載する住宅改修の申請における改善を期待する日常生活活動及び改修に期待する効果には、一定の傾向がみられます。東京八王子市に申請された住宅改修が必要な理由書を分析した研究内容を見ていきましょう。

改善を期待する日常生活活動を項目別にみると、排泄動作は重度要介護者でより改善を期待する日常生活動作とされており、1日に複数回発生する排泄動作は、介護サービスですべてに対応できず、介護者による介助が必要となるためとしています。入浴動作は要介護1で最も多く、重度要介護者は訪問入浴や通所サービス等を利用するために自宅での入浴ニーズが少ないとしています。外出・階段昇降では要支援1の割合が高く、出入口から敷地外までの屋外移動や上がりかまちの昇降に対する改修が計画されており、日本家屋に特徴的な段差が多いことが、要支援者での改修が多くなったとしています。これらの内容は要介護者でも申請されており、訪問入浴や通所サービスの利用時に定期的な外出する必要がある、要支援者での住宅改修を計画する際にも、要介護状態を見越した玄関の改修計画が必要であることを示しています。

住宅改修に期待する効果は、すべての要介護度で該当者が多い項目（転倒等の防止・安全の確保、動作の容易性の確保、申請者の精神的負担や不安の軽減）と、重度要介護者で該当者が多い項目（できなかったことをでき

るようにする、介護者の負担軽減）という異なる傾向を示しています。

重度要介護者で該当者が多い項目は、重度要介護者では対象動作を実施できない者が一定の割合を占めること、また介護者の介助が必要な場面が増えるためとしています。できなかったことをできるようにするとは、実際の生活上で行える日常生活動作を増やすことを指し、日常生活動作能力や介護者の負担感に施設入所に影響を与え、住宅改修は中等度・重度要介護者の在宅期間の延長という役割が期待されています。

これから、住宅改修は加齢により心身機能が低下していくことを念頭に置き、在宅生活が続けられるよう、利用サービスなどを把握し、改修計画（図1）を検討する必要があります。



図1) 心身機能が低下しても在宅生活が
継続できる視点での改修

参考文献

1) 土屋瑠見子, 北村智美, 太田智之, 服部真治:「介護保険制度の住宅改修における「住宅改修が必要な理由書」を用いた記述的研究:要介護度と理由書作成者の職種による違いの検討」, 日本公衛誌, 72(7), 495-505, 2025

建築から見る

デザイン紀行 10

～過去から現在そして未来へ～

大阪のデザインがアツい

(大阪府・各所)



今年9月、大阪ではデザインにまつわるイベントが数多く開催されました。その中でも特に印象的だった「DESIGN WEEKEND OSAKA」についてご紹介いたします。

「DESIGN WEEKEND OSAKA」は、大阪府内各所で行われた自律分散型のデザインイベント。首都圏の影響を受けない「大阪ならではの」独自文化を背景に、中小製造業やデザイナーの力を掛け合わせ、「大阪の今」をアツく表現したいという想いから開催されました。会期中は約50もの展示が府内各所で展開され、私はその中で「composition」と「new normal」という2つの展示を見学しました。

「composition」は、大阪を拠点に活躍する江口海里氏がディレクションを担当。毎回テーマが設定され、それに対して複数のデザイナーがプロダクトを提案します。今年のお題は「artifacts」「本来の創造性とは何か、デザインの原点とは」という抽象的なテーマでした。出展された作品には、雑音の多い社会で聞き逃してしまっている音を耳を澄ませるためのプロダクトや、

散歩中に見つけた草花を摘んで愛でる携帯式的花器など、日常の行為や出来事を見つめ直す中で生まれた新しいプロダクトが並びました。童心にかえる感覚から導き出されたその形は、デザインの可能性を再発見させてくれるものでした。

一方「new normal」は、「新常識となるデザインをつくる」をコンセプトに、2020年に始動。現在は「家業の新常識をつくる」をテーマに、家業を継ぐ企業の経営者とデザイナーが協業し、新たな商品や取り組みを生み出しています。普段は目にする機会の少ない高い技術力を持つ企業と、新進気鋭のデザイナーが合わさることで化学反応が起こり、新たな可能性を見出す、そんな展示でした。今回の展示は、今年のミラノサローネに出展された巡回展です。私もミラノでの展示を直接訪れましたが、そのときコンセプトモデルだったもの、そうでなかったものも含め、今回の展示ではさらにブラッシュアップされていました。

「こんな技術を持った会社が近くにあったのか!」という驚きもあり、またファブレスである弊社にとっては、アライアンス先を発掘するうえでも非常に学びの多い機会となりました。出展者の多くは20～30代の若手デザイナーで、実際にブースに立っていた彼らと直接話すことができ、大きな刺激を受けました。



これまで大阪は、首都圏に比べてデザインやアートへの関心が薄く、イベントも多いとは言えませんでした。ですが、今回の盛り上がりを見ると、関西圏の若手デザイナーの力によって徐々に新しい動きが生まれていることを実感します。

私自身も若手デザイナーの一員として、大阪を、そして日本を、さらに世界を、クリエイティブの力で盛り上げていきたいと強く感じました。

